

杉本順一先生を悼む

奥原弘人

昨年杉本順一先生が逝去になりました。謹んでご冥福をお祈り致します。

昭和59年ご出版の「静岡県植物誌」の著者紹介には「1901年静岡市に生れ、早くから植物学に没頭し、静岡県下をほとんどくまなく歩き、植物観察、採集を行う。また国立科学博物館、東京帝国大学、京都帝国大学等に出向し研修を重ねる。

この間に静岡県天然記念物調査委員、静岡県文化財専門委員、伊豆半島国立公園及び南アルプス国立公園調査員、登呂遺跡発掘調査員、牧野標本館研究員、天然記念物緊急調査員などとして植物関係の調査に従事した。さらに静岡県生物同好会会長、熱帯植物友の会会長などを務め、静岡県自然保護協会の設立にも参画した。主な著書として「日本樹木総検索誌」「日本草本植物総検索誌」「静岡県の植物」「伊豆半島の自然」「東海 of 自然」(検索誌以外は共著)など多数がある。」とある。この中4部の検索誌は分類学を志す者にとって欠かせない名著で私共は日頃その恩恵を受けているが、よくもこの細かいものをまとめられたものだと感嘆している次第である。

このような学究ではあるが、県内の本会会員で先生にお目にかかったことのある方は少ないと思う。私も本文執筆を命ぜられても適確に申し上げることは出来ない。私が初めて先生にお目にかかったのは昭和7年か8年かその頃である。当時下伊那教育会は郡内の植物調査を進めていて夏休みに南アルプスの調査を行った。荒川岳から東岳へ向う途中、この辺は静岡県であるが、静岡には杉本という研究家が居るとの先輩の話があった。その後頂上で2人連れの登山者に会ったが、その1人が杉本先生であった。この年先生は30歳をようやく越えた頃であるが、その名は本県まで知られていたのである。

その後もお目にかかったり標本を見ていただいたこともある。その一々についての記憶はないが、国立科学博物館のおしば展には続けて出品していたので、ご一緒に見てまわったり、牧野標本館では水島先生とお2人に標本を見ていただいた記憶がある。木曽で採った立茎性のツルマメを送った時は便箋3枚にわたりぎっしりとご意見を書き送って下さった。また若い頃根羽村でキクアザミとホクチアザミとの雑種とみられるものを採り小泉先生がホクチキクアザミとされたのがあって1点は下伊那教育会に納めたが先年標本室を調べたところ、それが見当らなかったもので、その事を何かに書いたところ杉本先生が

それをご覧になったらしく、その標本は確かにあったとわざわざ知らせて下さったことがあった。

水島先生がなくなられた後に頂いたお便りには「話は別ですが残念愁傷の事、水島先生のご他界は本当になさしき極みです。私も会葬に参りまして多くの学者や友人に会い口々に同様のかなしみを語りました」とある。この時私は前川先生と駅まで歩いたが杉本先生にはお目にかからなかった。以上の3件で私は杉本先生のお人柄がわかるように思った。

最後に私が先生にお目にかかったのは今から4年前の昭和60年12月4日である。それは先生の背かれた「長野県植物総目録」についてお尋ねしたいことがあったからである。これには長野県産の4000種に近い種名とその産地が記されている。先生は若い頃は長野県の植物も調査されたことがあろうし、本書の巻末に「すえがき」として標本を寄与又は貸与された3氏と文献や報告書を下された横内斎氏など6氏の名があげられていて、それによって本書が書かれたことは分かる。しかし私にはその内容についてもう少し詳細に知りたい点があったことと疑問に思っていた点もあったので、それらについてお話を伺いたかったからであった。私の質問に先生は、分からない点は横内さんに聞いて書いたという意味の事を話された。因に昭和46年出版の横内氏の「長野県の植物」のまえがきには、「本稿の原著となったのは静岡県のすぐれた植物研究家杉本順一氏の『長野県植物総目録』である」とある。

先生のお宅は静岡駅南東の住宅街であった。1時間余お邪魔して帰ったが、玄関まで送っていただいたのが最後となった。その少し前に頂いたお便りに「私事老人現象下でもう研究も出来ず各種の会員も止め庭の草取りや植木の水掛けぐらいが仕事です。本存息子が病死しまして雑用がふえ」とある。

下伊那地区では南アルプスなどの標本を先生に見ていただいたという。今日私共は「長野県植物誌」の執筆に努めているが、これには先生の「長野県植物総目録」が大いに役立っている。よい物を遺して下さって有難い。

先生は各種の委員として努力されたようであるが、研究・執筆に専念されていたはお暮しは質素であったであろうし、息子さんに先立たれては真にお気の毒でした。どこもお悪い所はないようでしたが、あれから3年目、数え年88歳、高齢であれば致し方ないところであろう。はるかに合掌申し上げる。